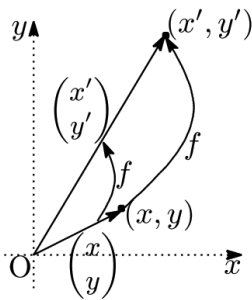


1 次変換

A 1 次変換とは

$$\begin{cases} X = 2x - y, \\ Y = x + 3y \end{cases}$$

i.e.  $\begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix} = \underbrace{\begin{pmatrix} 2 & -1 \\ 1 & 3 \end{pmatrix}}_A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$



のように、 $x', y'$  が  $x, y$  の 1 次式だけで表される  
 とき、

点  $(x, y)$  を点  $(x', y')$  へ

写す 1 種

写す変換  $f$  を、行列  $A$  の表す 1 次変換といい、  
 $(x', y')$  を  $(x, y)$  の像、 $(x, y)$  を  $(x', y')$  の原像と  
 いう。1 次変換  $f$  は

ベクトル  $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  をベクトル  $\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix}$  へ

写す変換とみなすこともでき、こちらの見方の方が  
 有用性が高いので、以降においては主にこの立場で  
 1 次変換を扱う。

B 1 次変換の意味

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \underbrace{\begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}}_A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$

のとき、ベクトル  $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  を

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = x \underbrace{\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}}_{\vec{e}_1} + y \underbrace{\begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}}_{\vec{e}_2} \quad \dots \odot$$

と変形すると

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} &= A \left\{ x \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} + y \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} \right\} \\ &= xA \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} + yA \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} \\ &= x \underbrace{\begin{pmatrix} 3 \\ 1 \end{pmatrix}}_{\vec{e}'_1} + y \underbrace{\begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}}_{\vec{e}'_2} \quad \dots \bullet \end{aligned}$$

とを比べると、 $A$  が表す 1 次変換  $f$  とは

右へ 1 だけ移動、上へ 1 だけ移動

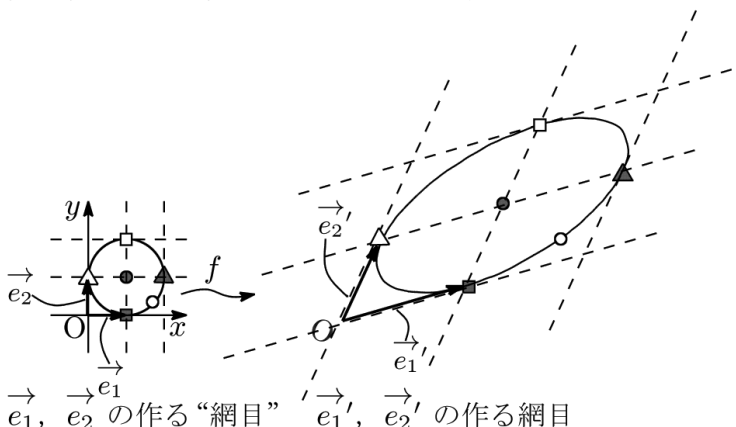
ベクトル  $x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2$  を

ベクトル  $x\vec{e}'_1 + y\vec{e}'_2$  へ

$A$  の第 1 列ベクトル、 $A$  の第 2 列ベクトル

写す変換であることがわかる。

次の左図中にある円周上の各点 (位置ベクトル)  
 および中心が、1 次変換  $f$  によって右図中のどん  
 な点 (位置ベクトル) へ写されたかを見て欲しい。1  
 次変換の意味が直感的にわかるだろう。



注 1) 1 次変換を表す行列において

$$\begin{cases} \text{第 1 列ベクトルは } \vec{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} \text{ の像,} \\ \text{第 2 列ベクトルは } \vec{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} \text{ の像} \end{cases} \quad \dots \otimes$$

である。

注 2) の変形において、行列の分配法則を用い  
 ている。この例からわかるように、1 次変換に  
 においては一般に

$$A(\alpha \vec{u} + \beta \vec{v}) = \alpha A\vec{u} + \beta A\vec{v}$$

(和はバラバラに変換してよくて、  
 実数倍は前に出せる)

が成り立つ。この性質のことを線型性という。

C 逆変換・合成変換

(1) 逆変換

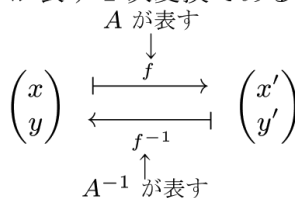
$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \underbrace{\begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}}_A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$

のとき、 $\det A = 3 \cdot 2 - 1 \cdot 1 = 5 \neq 0$  より  $A^{-1}$   
 が存在するから

$$A^{-1} \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = A^{-1} A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}.$$

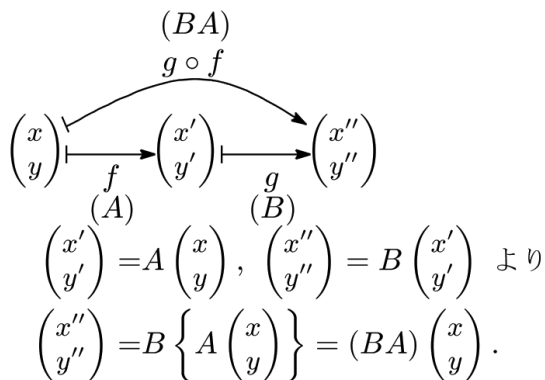
$$\text{i.e. } \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = A^{-1} \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix}.$$

すなわち、 $f$  の逆変換  $f^{-1}$  は、 $A$  の逆行列  
 $A^{-1}$  が表す 1 次変換である。(下記参照)



(2) 合成変換

2つの行列  $A, B$  が表す1次変換をそれぞれ  $f, g$  とし, 下図に示すような  $f$  と  $g$  の合成変換  $g \circ f$  を考える.



よって, 合成変換  $g \circ f$  は, 行列  $BA$  で表される1次変換である.

〈注〉「 $g \circ f$ 」において  $f, g$  が並ぶ順序と変換を行う順序が逆になるので要注意.

**D** 回転移動

大きさ  $r$ , 偏角  $\alpha$  のベクトル

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = r \begin{pmatrix} \cos \alpha \\ \sin \alpha \end{pmatrix}$$

を角  $\theta$  だけ回転して得られ

るベクトル  $\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix}$  は

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} &= r \begin{pmatrix} \cos(\alpha + \theta) \\ \sin(\alpha + \theta) \end{pmatrix} \\ &= r \begin{pmatrix} \cos \alpha \cos \theta - \sin \alpha \sin \theta \\ \sin \alpha \cos \theta + \cos \alpha \sin \theta \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} r \cos \alpha \\ r \sin \alpha \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

よって, あるベクトルを角  $\theta$  だけ回転する変換  $f_\theta$  は, 行列

$$R(\theta) := \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

で表される1次変換である. (これは定理として使ってよい)

〈注1〉  $f_\theta$  の逆変換は, 図形的にわかるように  $R(-\theta)$  で表される1次変換である.  $(R(\theta))^{-1}$  を求めてみてもわかる)

また,  $f_{\theta_1}$  と  $f_{\theta_2}$  を合成して得られる変換は, 変換の順序に関係なく角  $\theta_1 + \theta_2$  の回転移動となる. このことは

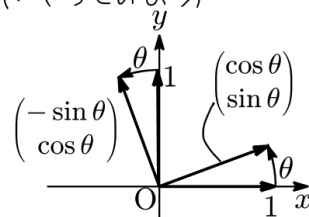
$$R(\theta_2)R(\theta_1) = R(\theta_1 + \theta_2)$$

逆でもいっしょ

が成り立つことを成分計算によって確かめることによってもできる. (←やってみよう)

〈注2〉角  $\theta$  の回転移動  $f_\theta$

が1次変換であることが既知とすれば, 2ベクトル  $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  の



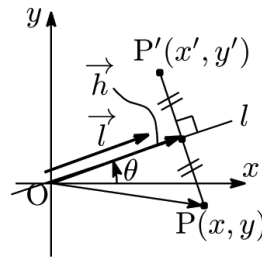
像を右図のように求め,  $f_\theta$  を表す行列が

$$\begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

であることがわかる.

**E** 対称移動

右図の直線  $l$  に関する対称移動  $g_\theta$  によって点  $P(x, y)$  が写された点を  $P'(x', y')$  とする.  $\vec{OP}$  の  $l$  の方向ベクトル  $\vec{l} := \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix}$  への正射影ベクトルを  $\vec{h}$  とすると



$$\begin{aligned} \vec{h} &= \frac{\vec{OP} \cdot \vec{l}}{|\vec{l}|^2} \vec{l} \\ &= (x \cos \theta + y \sin \theta) \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

これと  $\vec{h} = \frac{\vec{OP} + \vec{OP}'}{2}$  より

$$\begin{aligned} \vec{OP}' &= 2\vec{h} - \vec{OP} \\ &= 2(x \cos \theta + y \sin \theta) \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} (2 \cos^2 \theta - 1)x + 2 \sin \theta \cos \theta \cdot y \\ 2 \sin \theta \cos \theta \cdot x + (2 \sin^2 \theta - 1)y \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

$$\therefore \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos 2\theta & \sin 2\theta \\ \sin 2\theta & -\cos 2\theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}.$$

よって  $g_\theta$  は, 行列

$$T(\theta) = \begin{pmatrix} \cos 2\theta & \sin 2\theta \\ \sin 2\theta & -\cos 2\theta \end{pmatrix}$$

で表される1次変換である.

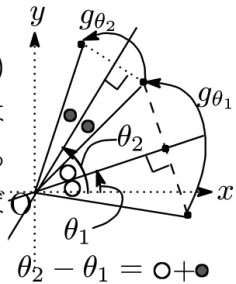
〈注1〉  $g_\theta$  の逆変換は、図形的にわかるように  $g_\theta$  自身である.  $(T(\theta))^{-1}$  を求めてみてもわかる)

また,  $g_{\theta_1}$  と  $g_{\theta_2}$  の合成変換  $g_{\theta_2} \circ g_{\theta_1}$  を表す行列は,  $\boxed{C}$ (2) より

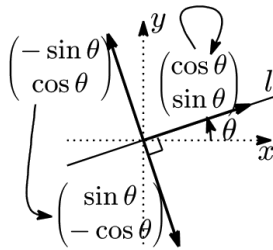
$$\begin{aligned} & T(\theta_2)T(\theta_1) \\ &= \begin{pmatrix} \cos 2\theta_2 & \sin 2\theta_2 \\ \sin 2\theta_2 & -\cos 2\theta_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos 2\theta_1 & \sin 2\theta_1 \\ \sin 2\theta_1 & -\cos 2\theta_1 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \cos 2(\theta_2 - \theta_1) & -\sin 2(\theta_2 - \theta_1) \\ \sin 2(\theta_2 - \theta_1) & \cos 2(\theta_2 - \theta_1) \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

(加法定理を用いた)

これは  $\boxed{D}$  の行列  $R(2(\theta_2 - \theta_1))$  に他ならないから,  $g_{\theta_2} \circ g_{\theta_1}$  は角  $2(\theta_2 - \theta_1)$  の回転移動である. このことは, 右図を見れば納得行くだろう.



〈注2〉変換  $g_\theta$  が 1 次変換であることを既知としてよいなら,  $g_\theta$  を表す行列  $T(\theta)$  を求めることができる. 2 ベクトル  $\begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix}$ ,



$\begin{pmatrix} -\sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix}$  の像を上図のように求めて

$$\begin{cases} T(\theta) \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix}, \\ T(\theta) \begin{pmatrix} -\sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sin \theta \\ -\cos \theta \end{pmatrix}. \end{cases}$$

まとまる

これら 2 式をまとめて表すと

$$T(\theta) \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -\cos \theta \end{pmatrix}.$$

$$\therefore T(\theta) = \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -\cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}^{-1}$$

$$\begin{aligned} &= \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -\cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ -\sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \cos^2 \theta - \sin^2 \theta & 2 \cos \theta \sin \theta \\ 2 \sin \theta \cos \theta & \sin^2 \theta - \cos^2 \theta \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \cos 2\theta & \sin 2\theta \\ \sin 2\theta & -\cos 2\theta \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

(定理として使つてよいが微妙)

ここで用いた (平行でない) 2 ベクトルの像から 1 次変換を表す行列を作る方法は, 頻出!

**F 逆行列がないとき**

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 3 \\ 2 & 6 \end{pmatrix} \text{ とすると}$$

$$\det A = 1 \cdot 6 - 3 \cdot 2 = 0 \quad \dots \heartsuit$$

より  $A$  は逆行列をもたない. このような  $A$  が表す

1 次変換による, ベクトル  $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  の像  $\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix}$  を求めてみよう.  $\boxed{B}$  で用いた手法を使うとわかりやすい.

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} &= A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \\ &= A \left\{ x \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} + y \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} \right\} \\ &= x \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} + y \begin{pmatrix} 3 \\ 6 \end{pmatrix} \\ &= x \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} + 3y \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} = (x + 3y) \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

☞ i.e.  $1 : 3 = 2 : 6$  のとき,  $A$  の第 1 列ベクトル  $\begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}$  と第 2 列ベクトル  $\begin{pmatrix} 3 \\ 6 \end{pmatrix}$  が平行になるため,  $\boxed{B}$  より任意のベクトルの像がベクトル  $\begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}$  と平行になってしまうという訳である.

なお,  $x + 3y = 0$  をみたす任意のベクトル  $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3t \\ -t \end{pmatrix} (t \in \mathbb{R})$  の像は, 全て零ベクトル  $\begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$  となる. (ベクトルが“潰される”)

〈注〉 前述した “潰される” ベクトルが存在するのは, 逆行列が存在しないときに限ることを示そう.

$$\underbrace{\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}}_A \underbrace{\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}}_{\begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix} \text{でない}} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix} \quad \dots \textcircled{1}$$

潰される

のとき, 仮に  $A^{-1}$  が存在したとすると  $A^{-1}A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = A^{-1} \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ .

$$\therefore \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

(背理法を用いた) となり仮定に反す. よって  $A^{-1}$  は存在しない.

逆に,  $A^{-1}$  が存在しない, すなわち

$$\det A = ad - bc = 0 \quad \dots \textcircled{2}$$

のとき,  $\textcircled{1}$  をみたす  $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  が存在することも示しておこう.

$$\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} d \\ -c \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ad - bc \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix},$$

$$\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -b \\ a \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ ad - bc \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}.$$

$A \neq O$  のとき,  $\begin{pmatrix} d \\ -c \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -b \\ a \end{pmatrix}$  の少なくとも一方は

零ベクトルではないから,  $\textcircled{1}$  をみたす  $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  が存在

し,  $A = O$  のときは, たとえば  $A \begin{pmatrix} 2007 \\ 19 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$

だから O.K. なんでもいってこと